ＯＢ会報第２号

鳳翮

巻頭言

そして、山へ行く奴は他の人間より純粋だとさえ思ったことがある。ところが山へ行く奴には、ナルシズムに似た自己陶酔者、鼻もちならぬ感傷家、反撥を抱かせるエゴイスト、見せかけに傲慢だったりはっきりと臆病な逃避者だったりする弱虫もたんといる。他の世界のいろんな人間たちと同じことなのだ。

結局、登山家とは何なのか。彼らを区別するものは何なのか。単に彼らが山が好きであり、山に登りたがる人種であることだ。

ところで山とは何なのか。単なる地殻の出っぱりにすぎぬ。とはいえ、それはやはりわるくないものだ。

北杜夫

目次

巻頭言
目次
会長挨拶……堺原　直毅　3
「阿蘇」に思うこと……末国　弘司　4
現役時代の思い出……岡田　耕治　5
コンさんのこと……米沢　和彦　6
雑感……寺町　常治　7
山行……木村　均　8
或る思い出……上田　功　9
無題……大久保弥生　11
日常生活の断片から……宮原　龍作　12
神岡新道の紹介……岩本　信弥　13
トレーニング雑感……田中真由美　14
昨年の今頃は、そして今は……古谷真之助　15
一事務局長の戯言……秋山　高弘　16
東京ワンゲルOB会の様子……松永　烈　19
近況……20
主将挨拶……前川　知徳　22
次期主将挨拶……寺園　光治　23
昭和五十二年度
山口大学ワンダーフォーゲル部活動報告……(A)　24
よろしくお願いします……(A)　27
昭和五十二年度OB会会計報告……事務局　29
OB会住所録……30
編集後記……(A)

山口大学ワンダーフォーゲル部
OB会

会長あいさつ

ＯＢ会会長
堺原　直　毅

梅が咲き、桜が待たれる時節となりましたが、諸兄姉に於かれましてはますます御健勝のことと存じます。

石油パニック以後の経済情勢は一部業種を除いては困迷を深め、不況色を濃くしてきており、雇用問題等社会不安を惹起してきており、これからも一段と苦労の多いことと思われます。現役諸君の就職は又多難な事と存じます。一層の奮気と努力を祈ってやみません。

さて、ワンゲルＯＢ会の運営につきましては、皆様方並びに現役の諸君の御協力により、一応の前進はみられるものの、中味の充実はまだまだと云わざるを得ません。

一昨年来の部の活動資料の編さんも終っておらず、又、昨年、創部十五周年にあたる総会も、現役の努力にも不拘、ＯＢの参加が少なく、盛り上りに欠けていたことは残念に思います。

各人　種々制約条件の多い中での活動で、一度に多くの成果は期待しにくいものではありますが、一歩一歩前進してゆきたいものです。

昭和五十七年の創立二十周年を目指して、左記の目標を設定してゆきたいと存じますので、多事多難の時節ではありますが、山口大学ワンダーフォーゲル部の旗の下、皆様の御協力と御支援を御願い申し上げます。

① 創部二十周年記念行事を計画する。

その為、適当な時期にＯＢ、現役で委員会を構成する。

② ＯＢ会組織並びに事務局の充実。

現在の事務局の責任者をＯＢより選出する。

（昭和五十三年二月）

「阿蘇」に思うこと

末　国　弘　司

阿蘇は、よく通った山である。高岳の北尾根、根子岳の岩峰…。どれにも思い出がある。景観を楽しみ、トレーニング場としても格好の山々であった。その阿蘇に〝山番〟として住むことになろうとは、実のところ予想していなかった。「おまえ向きのところだ」と社の先輩、同僚に半ば冷やかされながら、赴任して初めての冬が過ぎようとしている。

着任するまでは、「思う存分山に登れるかも」と淡い期待のようなものもあった。しかし、世界的な観光地を拘え、一人で仕事をするとあっては、人の遊ぶ時ほど忙しく、休みもままならない。谷筋ひとつに至るまで丹念に歩いてみよう、との夢はなかなかかなえられそうにない。

夏と冬、最低一週間程度の山行をするのがこれまでの方針であったし、そのために多少の無理は通しても、実行して来た。駆け出し時代の三年間を除けば、本社か支局勤務だったこともあって、なんとか出来た。特に阿蘇に転勤するまで本社の五年間は、年間三十日から五十日の山行を確保していた。

それが…とグチってみても、はじまらない。一人勤務地でも休みは休み、と割り切って一月中旬、一週間の休暇を強行した。転勤前からの計画通り、社の先輩の遭難地、白馬を単独トレースしたかったが、日数が足りない。やむなく大山のスキー山行でお茶を濁すことにした。

一年ぶりの大山も、正月休暇後で登山者はほとんどなく、新雪直後に行き合わせたこともあって、元谷にベースを張っての行動が快適な日々に過ぎたことは収穫であった。新雪の山野に一人でシュプールを刻んで駆け回っていると、しみじみと山のすばらしさが身に染むものだ。

小倉在住時は、山岳会らしきものをつくりかけていた。それも新人ばかりだったので、私の転勤と共に消えたようだ。そして私もまた、以前と同じ単独行に戻った。しかし、である。日ごろの不節制が積み重なって来た、というべきか、永遠の青年を自認しても年齢はそれを認めてくれぬ、というべきか、ザイルパートナーのほしくなることが多くなった。仲間に頼るという意味ではなく、荷上げのために岩を登り直すという二度手間が苦痛になって来た、と解釈してはいるのだが……。

阿蘇では、異った面もある。高岳の鷲が峯ルート、根子岳の天狗

岩ー西峰縦走にしても、崩落が激しく単独ではビレイがとりにくい個所がいくつかある。改めて、パートナー探しをしなくては、と思っている。

阿蘇は、すばらしい山だ、と住んでみて改めて感じている。ハイキングから岩登り、スキーまで短かいアプローチで楽しめる。ビッグクライムを楽しむところではないが、初級から中級までは場が用意されている。欠点は豪雪と氷壁のないことだが、それは九州である以上、望む方が無理だろう。

三十キロを重いと思ったり、スキーのテールが回らないな、と感じるのと同様に、ザイルも使っていないと重く、長く感じるものだ。マニラ麻のころから思えばはるかに軽く、さばきやすい十一ミリのナイロンが、意外になじまない。パートナーを探しながら、ザイルがほこりをかぶらない程度に巻き直し、さばいてみる昨今でもある。同輩、後輩諸氏、天狗岩の重壁散歩に来ませんか。

一九七八年一月　記

（三十九年度卒部）

「現役時代の思い出」

岡　田　耕　治

ＯＢとなって十年も過つと現役当時の全てが笑い種となります。そんな話を一つ、二つ綴ってみたいと想ひます。

「野山へのいざない」という格調高い精度の高い山の地図・案内書を創ったことがあります。

その資料調査ワンデリングの時、大変罪なことをしてしまいました。ある山の登山道を調べる為に、山の麓に着いたのが夕方でした。折からの雨でテント設営も面倒で近くの民家に逃げこみました。そこのオッサンと気が合い、一宿一飯多酒の恩義に預りました。翌朝は見事な宿酔。調査も何のその、そのまゝ我が下宿に戻りました。編集会議の席で小生の発表の番が廻ってきました。〃あいまい〃なボヤーとした返答をしてしまいました。それから何日か過って、小生の言葉を基にその山が活字化され、各方面に配布される段になって小生も少々慌てました。その立派な案内書を片手に、小生がその山に初めて登り、ボヤーとした発言と現実が、大差ないのを知って

ホーッとしました。ロッキード事件に比べると可愛いゝものだと自分を慰め乍ら、真剣味の固まりであった皆様に深くお詫び申し上げます。

小生はマジメな顔をしていゝカゲンな事をするのを楽しみに生きて来た様な面があります。

合宿中の禁酒令を先頭に提案する一方、悪連中と語らってウィスキをザックの底に忍ばせる喜びは大なるものがありました。

又、ある時はこんな事がありました。今も多分そうだと想うのですが、合宿に出発する直前に、食料品を買込み重量を計り各メンバーに振りわけたものです。そのドサクサまぎれに砂糖と塩の袋を入れ替えておいた。入山して最初の昼飯。握り飯をガブリとやった時の連上の顔は今でも忘れられません。

罪なことゝは面白いことです。下級生の純心を踏みにじった事も度々有ります。その一つとして、天気図をデタラメに書いてもつともらしい顔をして説明すると、早速に雨に備える行動を始めました。その夜が晴天であったのは勿論です。

考えてみれば、何もかも面白い日々であった気がします。そんな小生にも真剣になった事はあります。

ボ　カ錬成に参加する度にザックの中に入っている砂の比重を軽くする為の研究に没頭しようとした事は一再ならずです。

又、当時、軽量であった小生はザックの重量が平等である事が大変不思議でした。ボクシング、レスリング、それに競馬だってボートだって体重別のハンディがあるのに……。

こんな暇な事を考えてくれる習慣をつけてくれたW・Vに感謝したい。所詮人生そのものも、暇な方面の考え方を押し通す方が、気楽だ。

私共、家族三人、元気に過しております。現役の皆様は、春合宿の準備に余念のない毎日だと思います。皆様のご健闘とご発展をお祈り致します。

（四十二年度卒部）

「コンさんのこと」

米沢和彦

岡田耕治氏は不思議な男である。秀才か鈍才か、はたまたバカか天才か、定かには判断できぬ。ワンゲル史にのこる奇行は数知れず。おまけにホラを吹く。かと思うと、すばらしい頭脳のさえをみせる。ただひとつ確かなことは、非常なテレ屋ということである。そのテ

レかくしのため、ことさら偽悪家のふりをする。たとえば、昨年、「O・B会報」が発行されると、さっそく、氏は電話口で小生にこうのたもうた。

「O・Bで原稿を書く暇のある奴はおめぇぐらいのものよ。まあ、ぜいぜい頑張れや」

ここで、「なにを！人がせっかく書いたのに」。と怒ってはならぬ。これこそ、コンさんの友情あふるる親愛の表現にほかならぬ。偽悪家なるがゆえに、心と逆のことを口走ってしまう。

とすれば、あの才媛のほまれ高い田村さんを口説いたとき、何と言ったのか、ぜひ一度聞きたいと思っている。まさか、「俺と別れてくれ」――こんなバカなことはあるまい。

ついでながら、この件につきもう少し書かせてもらうと、だいたい、コンさんと田村さんが結婚するなどとは、小生ごときには、夢想だにできなかったものである。ふたりが結婚すると聞いても信じられなかった。挨拶状を貰ってもまだ信じられなかった。これも、氏一流の偽りのポーズで、子供を作らないのもそのせいかもしれぬ、――こう疑ってみたりもした。が、ともあれ、めでたくベビーが誕生したところをみると、このおふたり、どうやら本当の夫婦らしい。それどころか、なかなかお似合いの夫婦との評判である。まずは、「事実は小説よりも奇なり」の段、一件落着というべきか。

ところで、聞くところによると、青年実業家岡田氏は、遠からず、四億だか四〇億だかの金を儲け、その一部をワンゲルにご寄付下さるという。ありがたいことである。しかしテレ屋の彼のこと、おそらくその大金は匿名で寄付するにちがいない。ワンゲルの現役諸君よ、そのうち匿名の大金がころがり込むかもしれぬ。お互いに心して待とうではないか。

（四十二度卒部生）

雑感

寺町常治

何年か振りで正月山口を訪ねた。目的はゼミの安部先生宅の訪問である。福岡より新幹線が出来、以前だったら四時間程度かかったのが二時間半に短縮され、その分県庁附近の散歩する余裕があった。山口放送のビルや本部跡での美術館等の建設が始まっており私達の青春のベースであった、鳳陽寮はキャタピラーの跡に水溜りが出来ペンペン草が生えて、木片一つなかった。裏門に位置し談楽室と食堂との間と思う杉の木数本が当時の面影であった。

私が卒業して十年の期間が過ぎたが心の中は昔のままであり、

小路の下宿の吉富や八坂神社横手の安本、消息不明の前田等の友人と飲んで騒いで一ノ坂川を歩いた頃と目の前の正月の静寂さのギャップに戸惑いを感じる。

安部先生の宅での正月の集りは恒例であるが、私の様に卒業十年となると出席者との面識がなく話しが進まず酒の度だけが増す。中座して雨の洞春寺や瑠璃光寺を散策したが、先程のギャップと酒が回っている興奮とで考えが纏まらず、ひたすら昔の面影をしのぶばかりで心は沈んでゆき常に考えの出発点、昔の山の生活の思い出と現在の生活とのつながりは何んなんであるのか？に戻り堂々廻りになり更に心が沈んでゆく。

現在の生活に山口の生活との同資部分を探すならそれは〝山〟という細い糸でしかない。ただその〝山〟に対する雑感は昔と今とでは大部異なると思う。昔は山に登る事はスポーツの色彩が濃かったが今はその色は薄くなりひたすら歩き、山に浸るの感が強い。

勤務先が常盤線の日立でありアルプスに対する位置も昔と較べにならない程近いので夏休みを利用して結構山を歩いた。北アルプスは人が多過ぎるので裏銀座の人の少ない所を狙って個別攻撃で登り、南アルプスは二年に亘って殆んど全山を歩いた。今后は秩父や東北の山々へ行こうと思っている。最近になってようやく自分自身の山歩きの歩調を体得出来、この事により山に対する自分の考え方も朧げながら姿を見せ始めて来た様に思う。これの確認作業を目的に山に登る事もあるが確かに摘んだと思った事が次の時には離れていて敗北感で山を降りる時もある。山に登る気持は平地での日々の生活で私達が見る事の出来ない、今迄歩いて来た風景に今后歩いてゆく道の風景を山では見る事が出来る所にある。平地の生活は山では見通しの悪い樹林地帯を歩くが如くである。私達はそれに耐えられなくなると友人を見つけて酒をのみ酒の勢いでフィクションの山頂を極めた征服感を味わう。

勿論この代償は二日酔いである。

以　上

（四十三年度卒部）

山　行

木村　均

卒部後一～二年間の山行は、まだ余裕のあるものであった。特にトレーニングをしなくても靴を履くだけで、全身から力がこみあげてくるような錯覚におそわれるだけの、若さもあった。

山行に理解ある「北の方」を得た辺りから、ばたりと体が重く成った。（体重が増えた訳ではない）。丹沢に一日足を運んだだけで、

一週間近く疲労感を覚えるようになった。

昨年、夫婦での本格的山行第一段に、小生が二度足を踏み入れたことのある、飯豊山を誠みた。梶川屋根の急登から、本山を経て川入に下る。あとは猫苗代湖畔の宿でのんびり……と学生時代に比べれば少しくブルジョワめいた内容を盛り込んだ。

トレーニングも殆んどなしで、いきなり入山が拙かった。初日から大ブレーキ。人間歳をとると「足から来る」と聞いていたが、まさか「齢三十路」ならずして……。六十前後のおじ(い)さんに追い抜かれ、現役時代の倍近くの所要時間にて、やっと門内小屋にたどり着く有様。小屋下にある雪渓までの水汲みの辛かったこと。結局、天候回復（強風雨が一週間以上続いていた）が望めないのを良い口実にして、元来た道をそそくさと下山。その足取りの軽かったこと。

其後はまた、思いついたように山関係の本を読んだり、TVをみたりで、もっぱら傍観者然としている。九州の地への出張を機会に九重方面に出掛けたりしてはみるものの、こんなことで良いのか知らんと思い乍ら靴を新調し、捲土重来を期している昨今である。

先後輩諸兄は如何に山行を楽しんでおられますやら？

（四十五度卒部）

「ある思い出」

上田　功

過ぎ越し日々は、忘れ去っていたようでも、決して消滅しつくしているものではない。わかりやすく言えば、中高と必死で習い覚えた英単語が、教養の英語と専門の外書と自ら選択して読破した数冊の横文字本と家庭教師として教えた読本以外に、まるで英語を使用しなかった大学生活の過程で、雲が散り霧が消えていくように記憶から失なわれてしまったかのごとくに感じていたにもかかわらず、社会に出、仕事に就き、その仕事の中で、日常的に英語を使用する必要に迫られるや、遠い昔の白墨の匂いと共に、次から次へと甦り、仕事を支える力となっていることに似ている。

がむしゃらでも何でもよい。種を蒔いておけば、やがて結び、林にも森にも育つということであろうか。従って、青春を貴重なものとして、若さをぶつけて美しく生きた者の畑には、無数の種が、豊かに芽吹かんとして、息づいているに違いない。単なる美化され、化石化された思い出のファイルとしてではなく、青春の生の記録として遡る時、数々の輝ける時が記されていることに気づくからであ

る。

この冬、正月を迎えるために帰省した私は、母から一枚の葉書を受け取った。暮れの二十七日に届いたという。

「前略、長い間、御無沙汰いたしておりましたが、お変わりありませんか？　十年前からの山日記を整理しておりましたら、ふと貴殿の事を思い出し、ペンを取りました。もう北アでお会いしてから八年ほどなります。たしか、後立山縦走の折、天狗大降りから松本迄、先になり後になりしながら歩いたと思います。誤りでしたらおゆるし下さい。今でも山へは行っているのですか？　僕は船乗りになり、休暇の折のみ山へ出かけております。現在は群馬に住んでおりますので、上信越の山が多くなります。この辺に来ることがありましたら、ぜひ一度、おより下さい。」

彼の記録に間違いはなかった。大学二年の夏、初めてのアルプス入山の折、知り合いとなった、友と呼ぶには、あまりに過ごした時が短かすぎ、さりとて、ゆきずりの人と称するには、あまり親しく時を過ごしすぎた古い山での知人からのなつかしい便りであった。その年の秋、唐松から望む剣の写真と、白馬から眺める鹿島槍の写真を送っていただき、その礼状を差しあげて以来の便りなのである。松本の駅で、青い林檎を、ベンチに座って、共にかじって別れてから今日迄、勿論、彼に逢ったことはない。しかしながら、この正月の休暇中、この一枚の葉書を読み返しながら、彼のことを思い起しながら、私は、過ぎ越し日々を、一挙に閑かに振り返ってみました。

無論、各人の歴史には、様々なる色調の糸が織り込まれて出来あがっていく生地の図柄のように、その人の友達や恋人や、その他多くの知己の行動や思考、及びその人となりが無作為に関係しあっているので、私とて、安易に通り過ぎて来た事柄を引用することは、差し控えるが、一つ一つ、歩んできた道を、ゆっくりと振り返ってみることは、とても大切なことのように思える。振り返って、豊かさを、傾けた情熱を、誇れるだけの、又、犯した誤まちや失敗を、教訓として活かしていることを証言できるだけの、過去から現在に至る足跡であるかどうかを知ることが出来るからである。過去を築き上げることは不可能であるが、将来に於いて、過去を立派に築き上げたといえるように、現在を、美しく大切に生きていかねばならないということである。

一枚の葉書によって過去に飛んだ私は、その時点から現在迄を一気に旅して、今、こうした思いを更に強くしている。いつまでも、悔いのない思い出を持ち続けるために、現在を、一日一日くいつぶしていきながら、年を取っていこうと思いを新たにしている。

了

（四十七年度卒部生）

無題

大久保弥生
（旧姓　木村）

ＯＢの皆様、お元気でしょうか。五十年に卒業して以来、山口にはまだ一度しか行っていませんが、昨年のＯＢ会には、多数、参加されたとか。時々思い出しては、行きたくなりますが、遠く、又、家庭をもっていると、なかなか行けません。卒業して三年にもなりますが、色々と、山口での生活、ワンゲルの仲間のことなど思い出しま　。たとえばコンパがたくさんあったこと（今でもそうでしょう。）　後河原のホタル、椹野川のとんびや、スッポンや、カモの赤ちゃんがたくさんいたこと、下宿のおじさんや、人の良いおばさんのこと、山にあちこち登ったこと（実はあまり登っていない。）等々。

私が、いいおばあさんになったら、娘や孫に山口は、とってもよい所だったよと教えてやりたいと思います。（山口での生活を聞いて、うらやましがるか、あきれるか、それはわからないけれど。）

今日は、五十三年の年も明けて、一月二十一日（給料日）。朝、電話でおこされて、「先生、雪の積もっとるよ。学校に行くと、どがんしょか。」と子どもの声。

外に出てみると、一面、銀世界、十五cm～二十cmは積っているようです。あわてて、連絡して、結局、休校になりましたが、職員は休業という訳にも行かず、学校に来て、今これを書いているのです。

私の住んでいる所を、少し紹介してみると。

ここは、阿蘇郡の蘇陽町、阿蘇といっても、裏阿蘇の方で、春によそから、わらびや、ぜんまいをつみにくる以外は、観光には、全く縁のない所です。宮崎に近い外輪山の上で、標高七三十m、冬は大へん厳しい所です。父兄は、たばこ、しいたけのさいばい、野菜農家等が多く、あとは、林業や、トラックに乗る人など、様々です。皆それぞれ下界(?)の倍ほど仕事をされていて大へんだなぁと思います。

子どもは、そのわりには、のんびりしていて、大へん素直です。運動場は、冬中使えず、体育館もないのでろうかや、教室をとびまわっています。あと二年は、ここでがんばって働くつもりです。

エビネラン（ランの一種）、山いも、きつね、山鳥などに興味のある方は、どうぞ遊びにきて下さい。

現役部員の方も、もちろん歓迎します。（大ぜいの時は、うちの庭でねて頂きます。）

まずい文章ですみません。

昭五十三・一・二十一　雪

（四十九年度卒部生）

「日常生活の断片から」

宮原龍作

元来、筆不精なのに、どうした風の吹き廻しか、事務用のボールペンを手にしてしまった。今、私は、山口に居た時から利用していた銭湯から、足早に、下宿に戻り、社会人ならぬ会社人として出発した時から、身につけていたヘヤードライヤーで濡髪を乾かし、即座に、寝巻きに着替え、学生時代より愛用していたヤグラゴタツに足を突込み、小田方より舞込んできた一枚のはがきを、コタツの傍らに置き、四年間過した中に愛着を植え付けてきた鳳陽寮・旧経済グランド、そして忘れちゃ無らぬ、方便山の思い出を呼び起しつつ、苦笑している。

未だに、相も変らぬ下宿生活に、事の不便さを感じ、遠方より来たる同輩の結婚式の案内状に一喜一憂し、「あいつがまた、どうして……」類のぐちをこぼし、現実には、多分に負い目を感じながら、気軽に行くさ、独身貴族なんだから。と、自らを励まし、摩よけに一升酒をと思いつつも、「勤め人に深酒は禁もつ」の念仏を唱え、若いOLの台頭勇ましスナックの片隅で、オンザロックにはやる気持を抑え、軽い水割り一杯飲む。染み着いた勤め人生活。

世は、まさに、いつ、原子炉の破片が頭上に、舞降りんとも限らぬ時代、そして、中学生がヤクザ曲りの報復殺人を平気で行う時、そうした世相に追打ちをかけるかの様に、自衛力増強の必要性を熱っぽく説く政界の貴公子。

雑然とした時世、今し方、始まったとは思わぬ。

戦後の尚急な経済復興・高度成長を隠れ箕に、数多く降下された退引ならぬ副産物、その最たるや、ロッキード・日韓疑獄、等の贈与行列。

形こそかわれ、余命の行く末予断ならぬ。

（四十九年度卒部）

神岡新道の紹介

岩本信弥

筆無精の私が、このような文章を書くのは、面映く、恥ずかしい気がする。しかし、この道のすばらしさを語るとき、そのようなためらいは、粉々に消し飛んでしまう。

神岡新道とは、神岡町打保から、北ノ俣岳北肩へ至るコースタイムが登り七・三〇、下り六・〇〇の登山道である。私がこのルートを下ったのは、ほんの偶然であった。社会人一年生の昭和五十二年夏、折立平から太郎平へ上がり薬師峠にテントを張った。しかし、北アの人の多さとアベックの登山者へのねたみ等で、少々嫌気がさし、どこか人の行かない道を下ろうとガイドブックをひっくり返してみたところ、この道をみつけたのである。アプローチ、バスの便、知名度から考えて北アの平均的登山者は寄りつかないだろうと踏んだのである。この判断は、裏切られなかった。太郎平から黒部五郎への従走路途中に存する北ノ俣北肩より寺地山から神岡へ至るそのルートをガスの切れ間より見出したとき、すごいと感じた。ただすごいと。そして下り始める。十分程のガラ場を過ぎて、すばらしい草原の急斜面。池があり、それ以外はすべてお花畑。そうして一時間も下ると北ノ俣と寺地山との鞍部にある無人の避難小屋につく。ここがまたすばらしい雰囲気の小屋である。

長いコースである先を急ごう。それから寺地山を越して一八〇〇米地点までは、まったくの普通の登山道で語るべき所は少い。しかしそのことが、一八〇〇米地点から最後の急な下りまでの花と草原のユートピアを引き立たせる伏線なのである。一八〇〇米地点を過ぎると花と草原の水平道である。ともかくすばらしい。汚れておらず、虫がたくさん、鳥がさえずり、まさに桃源境である。これほどの静寂さと、人の通っていない自然が北アに残されていたとは。しかし、その道もやがて過ぎ急な下りを終えて林道に出て打保に至る。打保からは、日に二回シーズンに関係なく、神岡町役場行の町営のマイクロバスが走っている。バスの中でこの道は、神岡町では、観光化を望んでいるが、営林署が強硬に反対しており、これからも現状維持との話を聞いた。観光も結こうであるが、あの自然は、人間のためではなく自然自身のためにあるのではなかろうかとわけのわからぬことを考えながら神岡線のオンボロ汽車に乗って帰路についた。

一応コースを説明したが、そのすばらしさは、筆舌に尽くしがたい。百聞は一見になんとやらである。私は、このコースを最大級の賛辞を持ってこの文章を読んで下さる方々にお勧めします。

でも私の拙い文章表現でどこまでわかって載けたか。まあみなさん出かけて下さい。

（五十年度卒部生）

トレーニング雑感

田中真由美

ワンゲルに入ってよかったと思うことに、トレーニングの事があります。

水泳以外は、何をやってもまともにできず、走ることは、一番の苦手。そんな私がワンゲルに入って四年間、何とかやってきたのも、先輩の励ましのおかげです。入部一日目のトレーニングで、走りながら、こんなクラブやめようと思っていたら、先輩から、「ガンバレヨ」と声がかかりました。それが、とてもうれしくて、今でもよく覚えています。それから後も、私は走るたび、最後尾。いっしょに走ってくれる先輩に申し分けないと思いつつも、今日こそやめようなんて思っていました。そのうち、山行が楽しくなって、もう一回なんて思っているうちに、一年間すぎてしまい、後は、かっこよく退部する理由もみつからぬまま、いすわってしまいました。

三年目になると、トレーニングを休む理由を捜すのに苦労するのではなく、十七時前になると落ち着かなくなるのでした。

これは、トレーニングの成果が、自分にわかるようになったからだと思います。ビリを走っていたのが、いつのまにか、中くらいになっていたのですから。欲もでて、もっと頑張ろうという気持ちに変わっていたのです。

ダッシュやボッカでいっしょに汗を流す仲間がいて、厳しいけれど、暖かみのあるトレーニングでした。

その上、太る悩みも解消したのだから、私にとっては、トレーニングがあったことは、とてもよかったです。

今でも、マラソンとなると、はりきって、子どもらに負けぬよう走っています。運動は楽しいです。それを教えてくれたのが、トレーニングです。

（五十年度卒部）

「昨年の今頃は、そして今は」

古谷真之助

卒論をどうにかごまかして完成し、学生時代の残り二ヶ月をどう過ごすか、と、今から思えば、ゼイタク過ぎる悩みにつきまとわれていたのが昨年の今頃である。結局、その二ヶ月は、大して有意義でもなく、のんべんだらりと惰性的に過ごしてしまったのだが、逆に言えば、それ故に学生らしく、或る意味では、意義深く過ごしたと言えるかも知れない。

そんな変化に乏しい生活の中で、唯一、義務感と情熱を傾けてやろうとしたのが、OB会報の発刊であった。その創刊号が今、机上にある。三〇ページ余りの少々、安っぽいものではあるが、表紙を描き、原稿不足を補うために、座談会などを行なった時のことなどが懐しく想い出される。上京してまだ一年にも充たぬのに、表紙の五重塔、雲上の鳳　山が、四年間の大学生活の様々な出来事とともに去来する。

一人よがりには違いなかろうが、OBとなった自分が今、この表紙を見て、そのような感概に浸ることが出来るとすれば、この表紙も成功であったと、自画自賛している。

それはさておき、当時、編集を行なっていて、何よりも頭に来たのは、極端な原稿不足であった。恐らく八十名近いOBに原稿を依頼したと記憶しているが、〆切日までに到着したのは、Y氏の原稿のみで、少々裏切られた感があった。そんな訳で、穴埋めにと企画した座談会の中で酩酊気味のG氏の言葉を借りて、そこら辺の忿懣を述べた次第なのだが、(曰く、妻がなんだ、子がなんだ、我等ワンダラー)それも、今、自分がこうして社会人の末席を汚すようになってくると、自己弁護的かも知れぬが、無理からぬことのように思えてくる。現に、一年前には、「OBどうした!」とブッた自分が、「まあ、まあ」といった論調に変わっているのである。しかも、この原稿にしても〆切の一月中には、間に合わないし、現事務局長に顔向け出来ぬ思いがする。我ながら、嫌な気持である。

そのような訳で、OB会報をこうしてみていると懐しさと共に、或る種の後めたさがつきまとうのは、如何ともし難いところである。しかし、座談会での発言にもあったように、現在、とても華々しいとは言えぬOB会に、かすかな光を与えているのがこの会報だとすれば、細々であれ、息長く続いて欲しいと願うのは、何も私一人ではあるまい。内容の充実を期待する次第である。

話は変わるが、卒業後の山行は、質的に一段と上方硬直傾向を呈

してきており、本年度は、わずかに、二度の山行しか消化していない。もっとも、入社後、「低山徘徊」を大方針として打ち出しているので、質的低下は必然のことなのだが、その分を回数でカバーすると決心していたものの、なかなかダメである。どうもダメである。あり余るお金で装備だけは新しく買い揃えても、これでは、守銭奴が貯めた金を一枚一枚数えてはほくそ笑む、などということになりかねない。そこで起死回生、近く、低山をウロウロすることに決めた。低山徘徊――自堕落な自分には、これが、どうもふさわしいように、この頃しきりに思っている。（一月三十日　記）

（五十一年度卒部生）

一事務局長の戯言

秋山　高弘

やっと　この０Ｂ会報第二号の発刊をもって　私も　０Ｂ会の仕事から解放です。　まだまだ　０Ｂ会の活動が不充分な状態にあることは承知していますが、それでも過去幾度か出来ては消えていった０Ｂ会のことを考えると　この一年間なんとか活動を続けたことは　それなりに　また　一歩踏み出したと言えるのではないか　と密かに自負しています。今後　どの様に形は変わっていくかはわかりませんが、ともかく活動が末長く継続され、やがてはそこに良い意味での伝統が生まれてくれたらと願わずにはいられません。

この一年間を通じて　私なりに努力したことは　０Ｂ通信等の発送によって出来るだけ０Ｂ諸氏に現役部員が今どの様な活動をしているのか知ってもらおうという事でした。今まで夏・春合宿の要項など二・三年前の先輩にだけ送るといった状態だったのですから。しかし　結果的に　合宿の概要を知らせるだけに終わったことは否めず、例えば現在クラブの抱えている問題点などを明らかにすることによって、それを０Ｂ諸氏と共に考えていくようなことが可能に

なれば理想的なのですが……。

今年度ＯＢ通信は五通であり、その内容は夏・春合宿の報告及びＯＢ総会、ＯＢ会報に関しての連絡で終わりました。ＯＢ通信など送料五十円にプラスα（紙代、封筒代、など）ぐらいで　安いだろうと考えていたのですが、意外と雑費はかさむもので、ＯＢ会報の値段（今後、原稿が増すにつれて原価もある程度まで上昇していくであろう）などと兼ね合わせると、年間七～八通といったところが限度ではないでしょうか。そういった面からも　上記の理想は制限を加えられることになりそうです。

さて、今私が一番思うことは、ＯＢ会の世話を　現役部員がすることの限界です。確かに学生は社会におられるＯＢ諸氏に比べれば時間がたっぷりあるわけですから　ＯＢ通信の印刷、宛名書き、などやり易く、かつやれるわけです。そして今の様に　時々　ＯＢ通信を発送する、年一回、ＯＢ総会を開きＯＢ会報を発刊するといった活動で満足するのであればべつですが、そういった活動から更に飛躍しようとしても、（どの様な飛躍であるのかまたあるべきか今の私にはわかりませんが）、必らず　現役部員のＯＢ会事務局ではなしえない。

少し話の脱線になるのかも知れませんが、例えば　今のワンゲル部は　ＯＢ会から金銭的援助を受けていません。正直言って我々部員からすれば　少しでもその様な援助があれば助かるのは事実です。ＯＢ諸氏の中には個人的にカンパして下さる人もいますし、ＯＢ会費の中から　いくらかがクラブの方へ流れているのではないかと考えている人もいるようです。それらの人々はクラブに対してその様な援助をすることに対してとりたてて反対するものではないでしょう。またＯＢ会の目的の一つにクラブを盛りたて、助けていくことが含まれるのなら、当然その辺は検討してみてもよいのではないでしょうか。そこで　ここで言いたい事はお金を少しまわして下さいなどということではなくて、検討してみてもよいのではと思った時、その事を　ＯＢに言えないということなのです。何も今クラブが金が無くて存亡の危機に立っているなどという事は全く無いわけだし、そうである以上ＯＢに言う必要はない。とすれば　ＯＢの誰かが言い出してくれるのを待つか、それともさっさとあきらめて考えないことにする方が良いということになるのでしょう。

もっと良い例を挙げてみましょう。　ＯＢ会会則。部則ではＯＢ会の章に　ＯＢ会については会則をもってこれを定める　とありますが、現在のところＯＢ会会則なんてものはありません。ＯＢ会費として年間千円徴収するということが、わずかに慣例化されているぐらいのものでしょう。まだ　このＯＢ会も　出来て間も無いし、今後ゆっくりと定めていくべきものなのかも知れません。我々

も会則などはＯＢが草案を考え、ＯＢ同志で決めるべきものだと考えて、特にその草案を考えていこうということはしていません。つまり　ここでも　我々がＯＢに口出し出来ぬというよりすべきでない問題が残っているわけです。

更に言えば、先にＯＢ会の活動がまだ不充分だったと書きました。私としてもＯＢの皆さんと鳳凰山に登ったり、家族ぐるみでハイキングしてみたり、また有志でより高度な山を目指してみたりといったことが出来ればと思うのですが、そういうこと自体いやな方もおられるでしょう。参加したい人が有っても　それが　どのくらいの人数なのか、日程的にはいつが一番よいのかなど全くわからず、努力不足といわれるかも知れないが、返信用ハガキを同封してすら一部の人を除いては　かえってもこない状態では本当のところ　のれんに腕押ししている様な気分なのです。

先程　飛躍という言葉を使いましたが、ＯＢ会の発展ということを考える時その発展の方向性を定め、その方向に引っぱって行くのは　他ならぬ　ＯＢの皆さん方以外にありえないわけです。我々現役部員は出来るだけクラブの現状を皆さんにお知らせしていくと同時に、ＯＢ会に関する全ての雑用はよろこんで引受け、少しでもお手伝いするつもりでおります。

しかし　本来ＯＢの問題であるＯＢ会において、例えばＯＢ総会など　日程、場所、内容などすべて現役が決め、案内状を出し、引っぱっているというような状況では　いずれ何らかの限界という壁にぶっからざるを得ないのではないでしょうか。

ＯＢの皆さんにとっては当然わかっておられるであろうこと、あるいはくだらないと思われるかも知れぬ事を　ぐだぐだと書いて来ました。社会人としての忙しさゆえ、わかっていながら、どうしようもない先輩方の歯ぎしりが聞えてきそうです。私自身この四月から社会に飛び込む身であり、入ってしまえば恐らく仕事に忙殺されて何も出来まいなどと考える仕末です。

現役部員としての立場から、言いにくいことも　めちゃくちゃに書きなぐったつもりです。

ＯＢ会の仕事をして有難かったのは、色々と協力して盛りたてて下さる先輩の存在でした。　岡田氏はＯＢの方々の住所や電話番号など教えてくれましたし、米沢氏は今年度が十五周年にあたることを教えて下さいました。（実は十六年目とばかり思い込んでいた。）加藤氏はＯＢ総会の企画として木山氏の講演などどうかと御教示下さいましたし、木山氏はこれを快く承諾して下さいました。

また末国氏などはＯＢ会の在り方について色々と考えておられる様で　話しにいらっしゃいとさそってもくれました。何度遊びに行こうかなと考えたことでしょうか。

よき先輩を知ることが出来、これからも　ワンゲルのＯＢということでおつき合い下さりたいと願うと同時に、いつかまたお目にかかる機会がありましたら、ＯＢ会のことについてや、ワンゲルのこと、更には人生の色々な事について話してみたいと考えている昨今です。

二月二十八日

（経済学部　四年）

東京ワンゲルＯＢ会の様子

松　永　　烈

山口本部の現役の方々いかがおすごしでしょうか。

東京の方　先月二十九日にＯＢ・Ｇ会を開催しましたので少々お知らせいたします。

これは、昨年秋に引き続いて年二回を恒例化しようとしているＯＢ・Ｇ会の春の部で、新しく上京して来た四人の新人の歓迎と、他に他任地から二人（森本氏と香月君）上京して来たためのものです。次回は少々集合が難しいのですがどこか近郊にハイキング程度のものをとなりました。

今回は渋谷に午后集まり公園通りの中華料理店で会食をやったあと、ＮＨＫの前（代々木プール前）まで散歩し、その後解散しましたが、別の写真のように十八・五人（木村氏の子供さんを含むので）と盛会でした。ただ東京といっても名ボのように神奈川、千葉、東京と割と広い所に各人が散ばっているためと、何といっても場所代が高いため会場探しには幹事の木村さんにいつも苦労かけていますし、せっかくだから次回は戸外でということになった次第です。

現在の所これ以外別に何の行事もやっていませんが、また個人（幹事）の事務量をあてにすればこの程度でいいのではないかと思います。あとは、個人的なものでという所です。ただ今後もずっと続けて行こうということで家族も含めて広く楽しいつき合いを目ざそうということになっています（そういうことで今回の会費は独身も夫婦同伴も同額としました）。

今後どういう方向に向って行くかわかりませんが、東京はやはり山口の方から遠く何かとそちらの情報も少いようですので現在の活動や何かの情報もそちらのＯＢ会事務局の努力いかんということになります。また、他の地区でのＯＢ会の話についても聞きませんので今後さらに各地にＯＢ会の組織が（といっても先に言ったように強いものではなくて良いと思いますが）できるよう頑張って下さい。顔も見たことのないとなると義理も何もなくて、なかなか活動も大変だとは思いますが、更に頑張って行かれる様に願っています。

一九七七、六、十六　夜

（編集子注）　松永氏からＯＢ会事務局に送られて来た手紙をそのまま使用させていただきました。

近況

ー皆さんお元気ですか？　私も元気にやってますー

米沢　和彦（四十二年度卒部）

年ごとに低下する学生の学力を嘆きつつ、学問の道に精進しています。

ところで、いささか宣伝めいて恐縮ですが、昨秋、中村貞二先生・嘉目克彦君との共訳で次の翻訳書を出版しました。

W・モムゼン著

「マックス・ウェーバー」

未来社　二四〇〇円

おかげさまで、専門書としてはまずまずの売行きで、現在増刷中です。少々高いので、お買い求めになる必要はありませんが、ついでの折、書店で表紙だけでもご覧いただければ幸いです。

中村　幸子（四十五年度卒部）

私の方は都内（板橋区）へ転居しまして便利の良い所へ住んでいます。子供二人（男四才、女三才）と遊んだり、けんかしたり一日

中バタバタしています。でも何か趣味を持ちたいと思い二年前からエレクトーンを練習しています。レパートリーも少しづつですが増えていて、やめられなくなってしまいました。

今は四月の発表会めざして「アドロ」を練習中です。

（ワンゲル時代の私からは想像できないと思いますが……）

今週末には家族でスキーに出かける予定です。子供がもう少し大きくなれば、親子で山にも登りたいと考えています。

それまで身体をきたえておかなければ……。

井上　実智夫（四十六年度卒部）

過日、私が教えた篠川君と松永君が来て、今年の本部合宿の話をしてくれ懐しく思いました。僕も高校でワンダーフォーゲル部の顧門をして毎年春夏秋と野山をうろついています。

今年は十種と四国の剣、三嶺と剱ヶ岳でした。

三嶺で水が一滴も手に入らず、八月の四国の山中で丸一日呑まず食えず（水がないので食物がのどを通らないのです）の経験が貴重なものになりました。

また過日、同期の鷲見君、工藤君の音頭でＯＢ会が宇部でありましたよ。皆んな懐しい顔でうれしい一時でした。

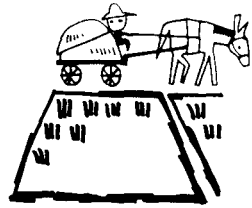
どうも僕は気分屋で困るのですが気楽な調子でＯＢ会とつき合ってもらえればと思っています。

Ｐ・Ｓ

この秋　徳山のマツノ書店（〇八三四ー二一ー二一九五）から「防長百山」二〇〇〇円という本が出ていました。とても面白いし　皆に紹介してもいいのではと思いましたよ。

（注）

事務局に来たハガキの中から抜粋させていただきました。



山口大学ワンダーフォーゲル部
主将挨拶

前川知徳

このところ山口は今年最大の寒波のために連日雪の日が続いています。しかし、三寒四温と言われますように、この寒さも過ぎれば日々春の様相を呈してくることでしょう。私の下宿（東滝山荘）も二十センチ程の雪に埋もれ、ここから眺められる瑠璃光寺五重塔はその姿を一層美しく見せています。OB諸氏にとっても雪の山口には思い出深いものがあるのではないでしょうか。

さて、私も第十七期執行部主将に就任して早や一年が過ぎようとしています。今年も例年通りいろいろとありました。（詳しくは活動報告を見て下さい。）昨年度のような県内合ワン主管、そして中四合ワン主管といった大行事はなかったのですが、我々も先輩諸氏の残された伝統を受け継ぎ、その充実化を目指して努力してまいりました。幸い良い先輩と後輩に恵まれ、我々執行部の期待通りのサークル活動が出来たと思っています。しかし、問題も少なくありません。この場をかりて現在我々のかかえている問題点を掲げてみますと、まず、サークル活動の規模拡大の問題です。現役部員が今年度は総勢六十三名と近年まれな人数となり、大がかりな活動が出来る反面、その内容と部員の把握がかなり難しくなっているのです。我々執行部もその点を考慮し、安全対策の充実化、冬季活動の活発化を働きかけて来ました。安全対策委員会の設置、トレーニングの充実、そしてスキーの導入等が具体的対策です。一応の成果は自認できますが、まだまだといった心境です。次は、ワンゲル長年の願望であった山小屋設立の件です。本年度の学生部との交渉でこの件について賛意を得られました。我々としても今後調査を行ない交渉を続けて行く方針ですのでこの件につきOB諸氏の助言があればよろしくお願いします。また、人数の増加に伴い装備や資料の不足・不備が活動を阻んでいる点も掲げられます。これらの問題は一年や二年で解決することは困難です。今後の現役部員の努力、そしてOB諸氏の協力が必要となることでしょう。

私も今年の四月から役員を離れ自由な立場になります。しかし、四年生としての役割がないわけではありません。三年間ワンゲルで学んだことを後輩達に伝え、共に活動するつもりです。また、四月からは現在の秋山氏からOB会事務局長を受け継ぐこととなりました。今だにOB会についてはっきり理解していませんが、私なりにOB会をより充実した機関にしたいと考えています。そして、次第にOB自身による円滑な運営が出来るようにと考えています。未熟

者ですが、よろしくお願いします。

（経済学部　三年生）

次期主将挨拶

寺園光治

次期主将になるに当たり、ＯＢ会報を通じて御報告させていただきます。

名前は寺園光治、鹿児島の錦江湾高校出身です。まだ未熟者ですが、よろしくお願いします。

我が執行部の特色は、二年全員で執行部を持つこと、執行部員八人中五人が二年三次入部者であるということです。この五人に、今までのワンゲルにない新鮮なものが期待できるのではと思っております。

方針としては、ややもすると山中心になりがちな現ワンゲル活動の中に、文化ワンデリングを取り入れ、深めようじゃないかと考えています。でも実際、我々は、本当の文化ワンとはいったいどんなものなのか、どんなことをすればよいのかはっきりとは分からない状態です。ですから今回は試行錯誤であり、ちょっとかじる程度に終わるかもしれませんが、それなりに一つの結果だけは残したいと思います。そして、私たちの試行錯誤が、これからの後輩のワンゲル活動の参考になればと思っております。

私を含めて、次期執行部員八人やる気でいますので、どうぞよろしくお願いします。

（経済学部　二年生）

昭和52年度　山口大学ワンダーフォーゲル部活動報告

月	行事	参考
4	公開ハイキング	新入生を対象として一般募集し、ハイキングに連れて行って自然の素晴しさを教え、新入部員勧誘の手段とする。 今年度は初めて山口女子大からも募集し、鴻之峰に行く予定であったが雨の為　体育館，教室でゲームに変更
	ワンゲル説明会	於教着20番教室。新入生に対しワンゲルとは何か、どの様な活動をするか入部後何を購入しなくてはならないかなど多角的に説明する。特に今年はS49年度春合宿（屋久島）や第15回中四合ワン（山大主管）のフィルムを上映し、好評であった。この結果約20名入部。
	新人歓迎登山	鳳　山へと一泊二日で山行。入部者約25名参加。県内合ワンに出してはずかしくない程度に山行技術を教える。
5	県内合ワン	於十種ケ峰。工学部・宇部短主管 参加校＝下関市立大，宇部短大，山大(本)(工)，宇部高専
	80km耐久徒歩	萩ー宇部。工学部主管　一般を含めて約300名参加。 本部部員は原則として全員参加。
6	リーダー養成	二年生2名に対し、上級生が1名ついて読図及びビバーグ訓練。 山口近郊の山。
7	錬成	砂を入れた重いザックをかつぐことにより、自分の体力の限界を知り精神力を養い更には苦しみの中からパーティシップを生み出す。2回に分けて行なわれ、1回目は3年生がリーダーとして立ち、そのコース、日にち、人数などを考慮して1，2年生が好きなパーティーに入る。2回目にはもう夏合宿のパーメンが決定されており、そのパーティーでコース，重さ等を決め、行なう。そしてこの錬成を二回こなすことは夏合宿参加の必須条件とされるのである。 （ザックの重さ）　一回目　二回目 男子　25Kg以上　30Kg－ 女子　20Kg－　25Kg－
	パーワン	パーティシップの強化を目的とする。山に行くことが多いがたまには海などに行くこともある。パーティーで話し合って決める。 今年は全パーティー山に入る。
	プレ合宿	2泊3日の日程で山大合宿所にて夏合宿に向けての最終調整を行なう。エッセン買出し、振分けなどもこの期間中に行ない、その最終日が山口を出発する日となるのである。

7	夏　合　宿	南アルプス	2パーティー	
〃		北アルプス	3　〃	集中地　長野県聖高原
8		東　北	1　〃	参加者　25名
		本部（聖高原）	1　〃	

4年5年が本部に参加し、近年まれにみる大人数の本部となった。無事集中し、聖高原の夜空をファイヤーでこがした。

11	公開キャンプ	一般募集で山大生にキャンプの楽しさを教える。今年の一般参加者は15名キンケイの滝でキャンプ及びファイヤー。　翌日鳳翩山に登る。
	中四合ワン	愛媛大学主管のもと、四国カルストに300名の中四ワンダラーが集う。山大本部は37名参加、ちなみに、この数は愛媛大に次ぐ人数である。ファイヤースタンツでは雪の上でフンドシ姿となり、久し振りに大うけ。
12	合ワン(徳山大)	徳山大にワンゲルがあることを知り、交流をはかる為、合ワンを計画。徳大6名、本部11名参加して鳥帽子岳にて行なう。
	学長杯駅伝大会	この大会に備えて後期は毎日7～8km走りこむ。男4チーム、女1チームエントリー。運動の部で男子は4位にくいこむ。尚、寺園(経2)が区間賞
	ワンゲル杯マラソン大会	本部ワンゲル主催、今年は工学部，宇部短，山女，合わせて61名参加。男子　牧野（工4）　女子　桑江（本3）が優勝。
	忘年ワンデリング	於鳳翩山。今年は6パーティーに分かれて各々が別のルートから鳳翩山に登頂。肩にテントを張る。夜、飲めや歌えや、踊れやとドンチャン大さわぎ。四年生との最後の山行である。
1	卒部式追出コンパ	15日、太陽堂旅館にて。卒部生13名。工学部，宇部短，山女及びOBの方など計100名を越え、ごったがえす。四年生にとっては最良の日。
	春合宿錬成	男岳，鳳翩，ダツヤ山にて。女の子が一人　ロードの途中ころんで腕を骨接。
2	雪上訓練	十種ヶ峰。雪に馴れる。（ラッセル，わかん歩行訓練など）
3	スキー合宿（予定）	大佐山にて（芸北）。スキー技術を得、向上させる。2泊3日　宿泊所　大佐山ロッジ。　半日スキー学校に入校。3月2，3，4日。スキーは体育会のを使用。今年が初めてのこころみ。
	プレ合宿(予定)	3月14，15，16日
	春合宿	16日出発。屋久島3パーティー、他九重，芸北，剣，西表に1パーティーづつ。

その他の活動

① 講　習　会

新人の入部後、夏宿前、その他必要に応じて講習会が開かれます。部員全体を対象とするものから、希望者を対象とするもの、合宿の同じ係を対象とするものなど様々です。内容は、エッセン，気象，衛生，装備，遭難対策など様々な分野に渡ります。

② 安全対策委員会

今年の主な活動の中に、安全対策委員会の設置ということも入れてよいでしょう。本年四月安全対策を強化するという目的のもとに上級生5名よりなる委員会を設置しました。主な活動としては、①安全対策に関する諸事項を検討し、執行部に対して要請，勧告を行なう。②山行計画書の安全審査，承認、などとなっています。

従来フリーワンの計画書等の検討，承認は主将一任となっており、より綿密な検討，安全チエックの強化を目標として設置されたが、実施段階で欠点が出てくるようであれば、更にそれをおぎなって改革してゆきたいと考えている。

(A)

人数構成

（S 53. 2現在）

	男	女	
5回生	2	−	2
4 〃	8	5	13
3 〃	6	4	10
2 〃	7	1	8
1 〃	24	6	30
	47	16	63

よろしくお願いします

— 今度ＯＢの仲間入りします —

①　プロフィール　　②　学　部　　③　出　身　校

5年生

藤　川　信　一

①スリムがびたりと決まり、ギターがうまい。ゼリア新薬工業に就職。

②農学部　農芸化学　　③東筑高校（福岡）

村　上　文　明

①もやし頭でガニ股の山男。広島の某企業に就職。ところが千葉勤務となりガックリ。

②文理学部　物理　　③基町高校（広島）

4年生

金　子　秀　明

①骨体美をスリムにつつんだ姿はなかなかのもの。ワンゲル内の鋭い一言家。

②文理学部　地鉱　　③福岡中央高校（福岡）

水　川　純　一

①体はあまり大きくないが、ど根生がぴったりの男。

②文理学部　数学　　③操山高校（岡山）

田　村　浩　三

①家業の農業と学問それにワンゲルの三つを立派にこなした。

②文理学部　国史　　③山口高校（山口）

弟子丸　篤　信

①今夏アメリカに行って来ました。文明氏の後をつぐ物理学徒。

②文理学部　物理　　③城南高校（福岡）

原　田　義　己

①たくましい体を登山服につつみ、ハードな山を目指すタフガイ。

②経済学部　経営　　③宇部（山口）

小　野　雅　文

①ひょろひょろと背が高い。故郷の伊予銀行に就職。

②経済学部　経営　　③新居浜東（愛媛）

原　口　　裕

①中四合ワンの実行委員長並びに副将として奮闘。皆の信頼厚い。東洋信託銀行。

②経済学部　経営　　③嘉穂（福岡）

秋　山　高　弘

①元主将兼トレーナー、現在はＯＢ会の事務局長。しぶ茶とまんじゅうをこよなく愛す。住友銀行。

②経済学部　経営　　③修猷館（福岡）

岩　佐　玉　枝

①まん丸い女の子。元女子トレーナーで女子のリーダーとして活躍

②文理学部　数学　　③筑紫女学園（福岡）

清　水　委　子

①ピアニストの卵で、広島で音楽の先生になります。

②教育学部　　③福山誠之館（広島）

森　　裕　子

①なかなか皆にその正体をつかまさない、おとなしいお嬢さん。

②教育学部　　③延　岡（宮崎）

山　北　みち子

①小柄でおっとりとしていて、やさしいお嬢さん。

②教育学部　　③糸　島（福岡）

猪　股　豊　美

①やはり小柄で親しみやすい。中四合ワンのファィヤーママ

②教育学部　　③延　岡（宮崎）

52年度　O　B　会　会　計　報　告

S 52. 3～S 53. 2

収入の部		支出の部	
前年度繰込し金	85,593	OB会報創刊号	46,253
OB会費	52,730	印刷代	
（S 53. 2まで）		郵送料	
OB総会残金	7,700	その他	
		OB通信（1～5号）等	41,400
		連絡事務費	
		紙代　印刷代	
		封筒代　のり・マジック	
		郵送料　その他	
		ハガキ代	
	146,023		87,653

残　金 …… 58,370

※　尚　この時点では　このOB会報第2号の代金は支払われておりません。

以上報告致します。

事務局長

※来年度OB会費納入についてのお願い

昭和51年度末のOB総会において、OB会費はこれを年間1,000円とすることが決定され、その徴収を始めました。

しかし　その時点で残り活動期間はわずかであり、為に充分な活動が出来ませんでしたので、52年度会費は　51年度分納入の方については免除とし、それ以外の方から徴収して来ました。

さて　この度　53年度からは正常に会費を徴収することになります。振り込み用紙を同封しますので　どうかよろしくお願い致します。

- 53年度会費　1,000円
- 口座番号　下関 16050　山口大学ワンダーフォーゲル部

編集後記

二月中に完成させたかったのですが、原稿の集まり具合、それに私の怠慢のため遅くなってしまいました。

創刊号より原稿は多くなりましたが内容はいかがでしょうか。感想、アイデアなど次期事務局長の前川君までお寄せ下されば、また来年度は一段と内容が良くなるのではないでしょうか。

それから原稿も年があけてから書くのではなくて、いつでも書ける時に書いて送っていただければ季節的にバラエテイに富んだ内容になると思うのですが……。

ともあれやっと終りました。

編集　秋山高弘
発行　山口大学ワンダーホーゲル部OB会
事務所住所　〒753 山口市水の上町3の5　小田方

※来年度も事務所住所はこのままです。